

國學院大學學術情報リポジトリ

エンディング

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋野, 淳一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001522



【写真11】 尾崎豊の歌碑 (渋谷区クロスタワー)
(令和5年11月30日、秋野淳一氏撮影)

《エンディング》

秋野 淳一

【秋野】第二回「しぶカフェ」はいかがだったでしょうか。視聴されている学生さんや市民の皆さん、渋谷に関心のある方などにとって、今後歩んでいく道筋や、サステナブルなまちづくりに参画していく上でのヒントに少しでもなったならば幸いです。

さて、私のほうからエンディングとして、本日のテーマ「渋谷の落書きとアートのあいだ」に関連する渋谷の話題を一つ、渋谷学の成果からご紹介させていただき、第二回「しぶカフェ」を締めたいと思います。

渋谷クロスタワー(旧・東邦生命ビル)の一角には、平成四(一九九二年)に亡くなった歌手・尾崎豊の歌碑(モニュメント)があります【写真11】。ここは尾崎が青山学院高等部の帰りに夕日を見ていた場所といわれ、尾崎のデビュー曲「十七歳の地図」(「十七歳の地図」CBSソニー、昭和五十八(一九八三年収録)の歌詞にも登場する、尾崎ファンの「聖地」の一つです。

歌碑やその周辺の壁には、「落書き」とは一味違った尾崎への「メッ

セージ」が所狭しと書き込まれています。「メッセージ」が書き込まれたのは、実は歌碑ができる以前のことでした。尾崎の死の直後から現在の歌碑のところに「メッセージ」が自発的に書き込まれ、そこに歌碑が建立されたのです。そして、歌碑ができるとさらに「メッセージ」が書き込まれて今日に至っています。

一時、尾崎への「メッセージ」とは何の関連もない「落書き」が書かれ、歌碑が撤去されかねない局面もありました。ですが、尾崎ファンで歌碑周辺を掃除し、訪れた若者の言葉に耳を傾けた渋谷区住民の年配女性の活躍や落書きとは性格の異なる「メッセージ」と判断した歌碑周辺を管理する旧東邦生命ビルの理解などもあり、歌碑は残されることになりました。

平成から令和へ、そしてコロナ禍を乗り越えつつある今日(令和六(二〇二四)年)においても、歌碑には尾崎の命日(四月二十五日)や誕生日(十一月二十九日)を中心に一年を通じてファンが訪れ、尾崎への「メッセージ」が書き込まれ続けています。そこで互いに書かれたメッセージを読んだり、ゆるやかにファン同士で交流したりするなどして、ファンを中心に多様な人たちの「つながり」が育まれています。それは、本日の傍嶋さんのお話を参考にし、という、渋谷区の清水さんのお話にあったように、渋谷区の条例(「きれいなまち渋谷をみんなでつくる条例」で落書きは禁止されていますが、このケースの場合は、社会的に「落書き」ではなく、尾崎の「聖地」という文脈の中で「メッセージ」と理解され、許容されたことで、多様な人々をゆるやかに包摂する場が生まれたといえます(秋野淳「尾崎豊の歌碑に集う人たち」東京渋谷の『聖地巡礼』—『都市民俗研究』第二十五号、都市民俗学研究会、令和二(二〇二〇)年、川向富美子「夕陽のスター」倉石忠彦編著『渋谷をくらす—渋谷民俗誌のこころみ』雄山閣、平成二十二(二〇一〇)年)。

これは、尾崎豊の歌碑に限らず、「野良犬」ではなく「忠犬」として社会的に受け入れられた「ハチ公」についてもいえます。単に異なるものとして線引きをして分断するのではなく、実はどこかでつながっているのかもしれない

ないというまなざしも捨てずに、本日のお話の中に出てきた「行為自体が及ぼす社会的変化や新たな取り組み」「プロジェクトベース」といったキーワードを参考に、主観的にのみならず、客観的に地域を見る視点も大切であることが、これまでの渋谷学の研究成果と照らしてみてもよく理解できました。そうした観点から、本日のお話は、サステナブルなまちづくりを考える際のヒントになるのみならず、都市を対象とした文化研究にも応用できるのかもしれない。地域に関わる人たちの多様性とその接点を、文脈を含め探求することが重要だと言えそうです。そして、皆さんのコメントにあった、おとなりサンデーをスタンプリーフでつなぐという地域イベント案は、そうした接点の一つになっていく可能性があります。

第二回「しぶカフェ」を最後までご視聴いただき、ありがとうございます。今後の「しぶカフェ」にもご期待ください。

【追記】

本記録は、國學院大學研究開発推進センター「(SDGs)と建学の精神」研究事業(研究代表・松本久史國學院大學教授)の研究成果の一部である。